

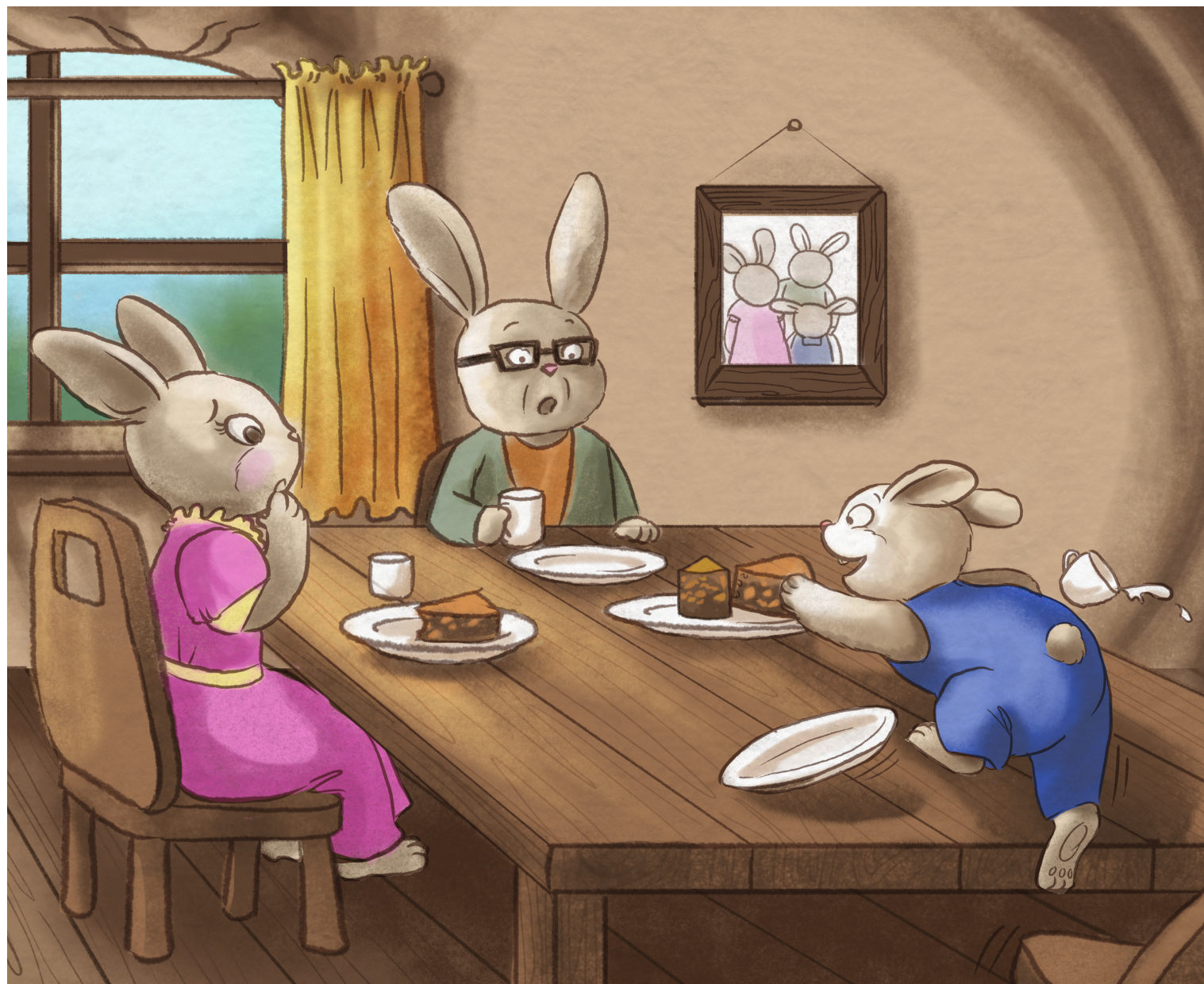
ビリーと 野兽

ウサギのビリーは、もう待ちきれません。
ハチミツ水に引き寄せられたアリたちが、
今にもビリーのアリの飼育セットに入ろうと
して集まってきているのです。できたアリの
巣を学校の発表会に出せば、ビリーは学校で
最高にかっこいいウサギとして知られる
ようになるでしょう。

ビリーは、学校でみんなから浴びせられる
称賛のことで頭がいっぱいです。食卓の上に
はい上がると、キャロットケーキをもう一切れ
と取っています。もうもどりました。

「まあ、マナーも何もあったものじゃ
ないわね。」お母さんウサギはあきれて
しまいました。

けれども、ビリーは全く上の空です。
お母さんやお父さんが最初の一切れも
食べ終わらないうちに、三切れも平らげて
しまいました。ごちそうさも言わずに
アリの飼育セットを見に、外に飛び出して
行ってしまいました。そばまで行くと、
アリたちをおどろかせないように、そろそと
近づいて、中をのぞきこみました。辺りが
だんだんとうす暗くなる中で、何か動いて
いないかと目をこらしました。アリは、
いたのでしょうか？ 1匹きもいません。



飼育セットの説明書に書かれていることは、全部きちんとやりました。
うまくいくはずなのに！ ビリーは、がっくりとため息をつきました。
木曜日までにアリが集まらなかったら、どうしよう？ クラスで発表できる
ものが、何も ないこと になります！ その日の放課後、ビリーはアナグマの
スモグルに、スモグルが発表しようとしていた曲芸技よりも自分の
アリの巣のほうがいいと言って、じまんしたばかりです。スモグルは土を
け散らしながら、おこって行ってしまいました。困ったことになりました。
(そうだ！ キャロットケーキなら、アリが集まるかも！)

家の中に飛びこみ、お母さんやお父さんまでおしよけて、最後の
一切のキャロットケーキをさっと取りました。間に合いました。いっしゅん
おそかったら、お母さんとお父さんが半分ずつ食べていたところでした！
ビリーは、急いでまた外に飛び出して行きました。

その夜、ビリーがベッドでうとうとしていると、お父さんとお母さんの
話し声が聞こえてきました。その日、だれかさんのマナーがめちゃくちゃ
だったと小声で話しています。ビリーは、それがだれなのかを考える間も
なく、あっという間にまどろんでしまいました。アリのことを夢見ながら…。
けれども2、3時間たつと、目が覚めました。

ベッドから出ると、ビリーはお父さんとお母さんの部屋へ行きました。

「お母さん。今、ハチミツを切らせてるでしょ。だから、アリをおびき
寄せるためにキャロットケーキを使わなくちゃいけなかったんだ。また明日、
作ってくれる？ お母さんってば！ 聞いているの？」

お父さんがうなり声をあげました。しかたなく、ビリーは自分のベッドに
もどりました。朝になったら、またさいそくしようと、ビリーは思いました。



あくる朝のことです。ビリーは、今日は何かあるかなとワクワクしながら
目覚めました。が、すぐにふきげんになりました。森の中でキャロット
ケーキが好きな生き物は、アリだけではなかったようです！ アリの飼育キットの
中のキャロットケーキが全部なくなっているばかりか、アリが1ぴきもい
なかったからです。

ビリーはぶんぶんしながら、引き出しやドアをバタンと閉めたり、家中を
足をふみ鳴らしながら歩きました。朝食の時には、ニンジンがゆを見て、
しかめっ面になりました。お父さんやお母さんが心配そうにビリーの方を
見ていることさえ、気が付きません。ビリーには、新しい計画が必要でした。
それも、すぐにです。



その日の お話の 時間、リーマス先生は、みんなに きらわれていた 可愛い 野獣の
物語を 読んでくれました。その物語には ハッピーエンドが あるのですが、ビリーは
その お話を 前に 聞いたことがあるので、他の ことを 考え始めてしまいました。
指や つま先を パタパタさせ、外に 行って アリを つかまえられたらなあとか、
ウサギの イザベルの 気を 引けたらなあ、などと 思っていました。ですが、ウサギの
イザベルは、アナグマの スモグルの方を 向いています。ビリーは 面白く ありません。
イザベルは、スモグルではなく、自分の 友達なのに。クラスで だれかの 方
を見ているとしたら、自分の 方を見ているべきなのに！ ビリーは 指の 間に 鉛筆を
はさんで クルクル 回しながら、せきばらいを しました。鉛筆を 回すのは、大得意なの
です。もう一度、大きく せきばらいを すると、もっと 速く 鉛筆を 回しました。すると、
イザベラが こちらを 向きました。が、リーマス先生にも 注目されてしまいました。
ビリーは 思わず 赤面して、鉛筆を 置きました。

「ビリー、野獣が そんなに きらわれていたのは どうしてか、分かるかい？」と、
リーマス先生が たずねました。

幸いな ことに、ビリーは その 物語を とても よく 覚えていました。「野獣は、他の
人の ことなんか 全く おかまいなしで、自分の ことしか 考えていなかったからです。」

「では、なぜ それで、野獣が 追放されたのかね？」

ビリーは、物語の 中での 野獣の ふるまいについて、考えました。「全然 お風呂に
入らなくて、くさかったからじゃ ないですか？」

「そうだね。だが 一番の 点は、自分の ことしか 考えなかったからということだね。」と、
リーマス先生が 言いました。



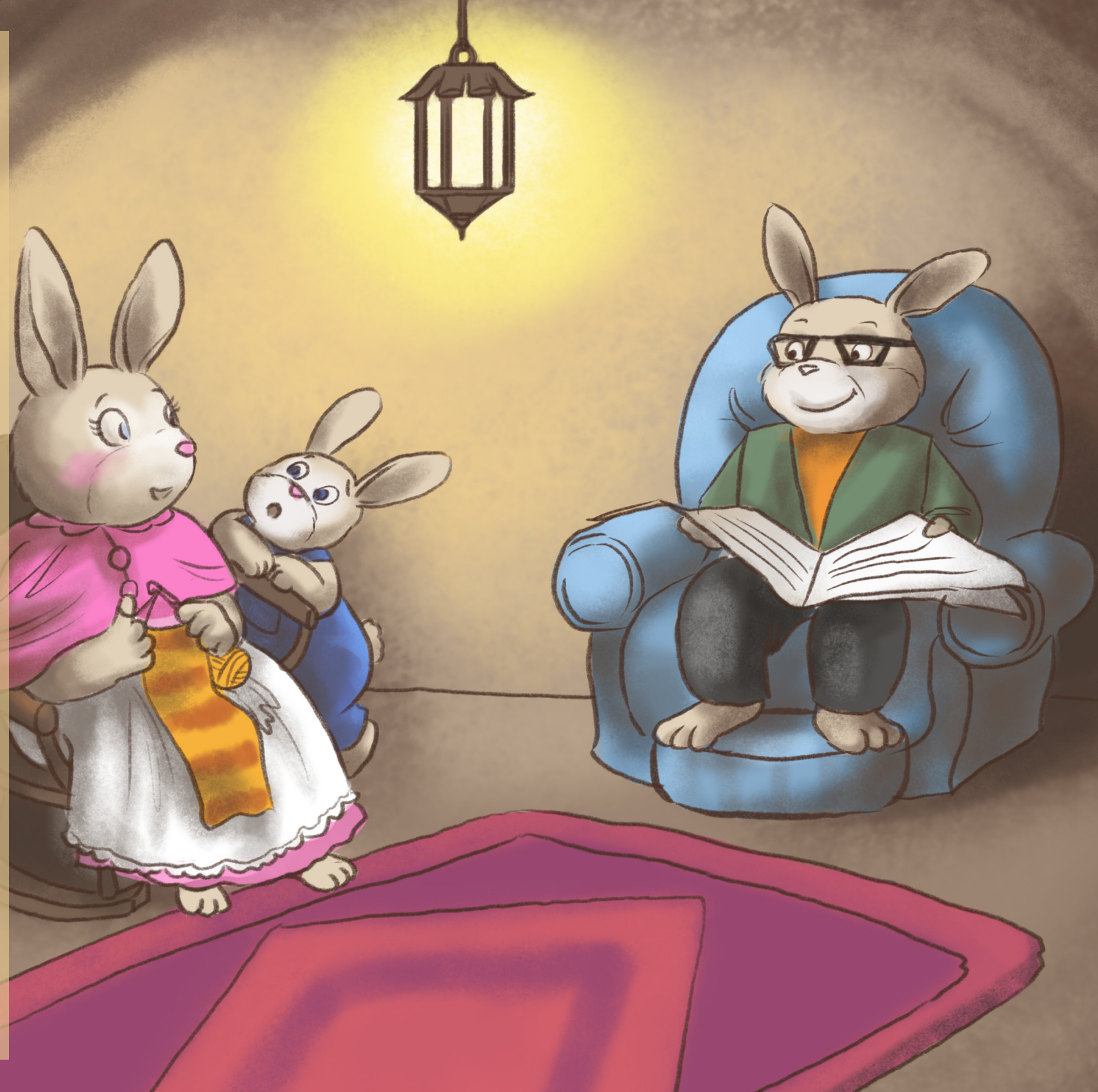
お昼休みになり、ビリーは いっしゅん、
どうして だれも 自分と いっしょに お昼
ご飯を 食べに 来てくれないのかなあ、と
思いましたが、すぐに、アリを つかまえる
次の 手立てを 考えるので 頭が いっぱいになっ
てしまいました。

下校の とちゅう、ビリーは 親友の
ヤマアラシ、アレックスを 呼び止めて、
アリをつかまえるのを 手伝ってくれない
かと たずねました。「ぼ、ぼく・・・宿題が
あるんだ。」そう 言うと、アレックスは
急いで 行ってしまいました。最近、
ビリーは ふだんよりも ずっと、一人で
いることが 多くなってきた 気がします。

夕食の 後、お母さんは 小さな おい達の
ために 編んでいた マフラーについて
話していました。お父さんは じっと 耳を
かたむけています。

「いつ、会いに 行けるの？」 ビリーは、
いとこたちが 大好きです。まだ 小さくて、
とても 手が かかりますが、ものすごく
かわいいのです。

「まあ、ビリー。あなたが アリ以外の
話を するのは、1週間ぶりねえ！」





ビリーはびっくりしました。確かに アリ以外の 話だって、
したはずで。昨日だって、お父さんと 場所について 話しました。
どこに アリの 飼育キットを 置いたほうが いいかって・・・。
何日か 前は、アレックスと 捕食動物の 話を しました。アリを
つかまえて 食べる 動物について・・・。

「やっと、現実に もどって来たようだね、ビリー。」 クスッと
笑いながら、お父さんが 言いました。

「もどって来たって？ ぼく、どこにも 行っていないよ。」

「だけど、おまえは 食事も そこそこで、話す 時間も ないくらい
だったぞ。」

「ぼくって、今週は ずっと、そんなに ひどかったの？」 ビリーが
心配そうに 言いました。

「そういう 訳じゃ ないわ、ビリー。ただね、あなたは 頭の

中が 自分の ことで いっぱいになると、家庭を 居心地良く して
くれる ほかの ことを 忘れてしまうのね。もし ビリーが もう
一人 いて、あなたと 全く 同じように ふるまっていたとしたら、
どうかしら？ テーブルの 上の 食べ物を 取ってもらう代わりに、
自分で テーブルに はい上がったり、いつもいつも、自分の こと
しか 話さないとしたら？」

ビリーは、最近の 自分の ふるまいについて 思い返しました。
そして、うちに もう一人の ビリーなんて、いやだと 思いました。
少なくとも、最近のような ふるまいを する ビリーなんて、
まっぴらです。アリが 寄り付かないのは、それが 原因だったので
しょうか。アレックスもです。だれも そばに いたがらない、
あの 野獣のように はりたく ない。今からは、ほかの 動物たちの
ことを もっと 考えるように 努力しよう。ビリーは、そう 決心
しました。正直言って、ここ 数日の 間は 一人ぼっちだったし、
いくぶん 悲しくも 感じて いたのです。相手が 自分だけなんて、
ちっとも 楽しく ありません。

その日、夕暮れの赤い日差しの中でホタルの
光が ゆらゆらと 飛び交う 中、ビリーは こわごとと
ガラス製の アリの 飼育キットに 近づきました。明日は
いよいよ 発表会です。中で うごめいてくれる 何か
絶対に 必要なのです。何か いる！・・・カブトムシだ！
その そばに、アリも 1匹 いました。

やっと 何か が つかまったので、ビリーは ほっと
ため息を つきました。このことを アレックスにも
伝えられたら いいのに。事実、発表会の 課題を 最初から
アレックスと いっしょに やってれば、ずっと
楽しかったでしょう。でも ビリーは、アレックスが
発表会のために 準備していた 課題に、関心 を 持とうと
しませんでした。今に なって、ビリーは 悪かったなあ
と 思いました。

「アレックス！ アレックス！」 登校の とちゅう、
ビリーが 声を かけると、友だちの アレックスが 立ち
止まりました。何やら、布を かけた ボードを 両手に
持って 運んでいます。ビリーが 近付くと、いつもなら
明るい 顔の アレックスが、心配そうな 表情を しています。

「どうしたんだい、アレックス？」 ビリーが たずね
ました。

アレックスは 布を かけた ボードを 下に 置くと、
鼻を すずりました。「ぼ、ぼくの 課題・・・大した ものじゃ
ないんだ。どっちみち、君のほどは 良くないよ。」そう
言うと、アレックスは かけていた 布を 取って、小枝や
木の 実や 木の 葉で 作った 小さな 村を 見せました。



「うわあ、アレックス。すごいじゃ ないか。きっと、作るのに 何時間も かかった
だろうね。ぼくも、そういうのを 思いついていたら よかったなあ。」

「本当かい？」 アレックスの 顔が 少し 明るく なりました。「手伝いたかって
たずねた 時は、アリの 飼育キットで いそがしいって 言ってたじゃ ないか。
だから、じゃましたくは なかったんだけど。」

「ぼくね、今週は ちょっと、野獣みたいだったんだ。」 ビリーは 顔を 赤く しながら、
ちょっと 笑って見せました。「ぼく、君の 課題を 手伝ってたほうが、楽しかっただろう
なって 思うんだ。何でも いっしょに やるほうが、いつも もっと 楽しかったもの。」

「ぼくも、そう 思うよ。ぼ、ぼくの 課題、発表会に 出す 価値 あるかなあ？」
アレックスが たずねました。

「もちろんさ！ みんな、こんな ちっちゃい 家が 並んでいるのを見たら、びっくり
するよ。うわあ、マガモ池まで あるんだね！」 ビリーは アレックスの ことを 思うと、
うれしく なりました。「さあ、行こう。君の 課題を 発表する 準備を しないとね。」

アレックスは 下に 置いた ボードを 持ち上げて、言いました。「君の アリの巣は？」

「まあまあだね。だけど、次回は ちがう やり方に するよ。」

二人は 学校へ 向かいました。自分の ことだけではなく、他の 動物達の ことも
考えるほうが、どんなに 気持ちがいいんだろう。ビリーは、そう 思いながら 歩いて
いきました。

